

序 文

第6回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会を2007年11月3日に大阪の梅田スカイビルで開催した。兵庫医科大学内科学(上部消化管科)に赴任してはじめての学会開催であったが、盛会のうちに無事終了することができた。この場を借りて関係各位に深謝申し上げたい。特に、今回は150名を超える多くの会員の皆様にご参加いただいたが、これはこれまでの年次集会の中でも最高の参加人数であり、この学会が広く認知され、そして多くの医師や研究者がこの分野に目を向けてきていることの表れではないかと感じている。さらに、いずれの演題も非常に学問的なレベルが高く、加えてフロアからの活発な討論があり、本当に意義深い時間を参加者と共有できたと満足している。

今回の学会では、最近Duke大学に移られたTakahashi Toku教授に「Effects of food intake on interdigestive migrating motor complex(MMC)」とのタイトルで海外招聘講演をいただき、またLondon大学のQasim Aziz教授に「Mechanisms of pain in functional gastrointestinal disorders」とのタイトルで海外特別講演をお願いした。Takahashi教授は渡米前に兵庫医科大学の外科に在籍しておられ、当大学とは深い縁がある。日本に戻られることも多く、しばしばご講演を拝聴する機会もあるが、今回は特に「食の乱れ」が消化管機能障害を引き起こしているのはいか、われわれには少しばかりの飢餓が必要ではないか、との提案を暗に含んだ興味深い講演であった。またAziz教授は内臓知覚過敏に関して世界を代表する研究者であるが、今回はこの分野の進歩と話題をわかりやすくレビューしてください。はじめての日本とのことだったが、日本をすっかり気に入った様子でよかった。また、この学術集会を

ずっと聴講していただき、「日本の神経消化器病研究のレベルが思ったより高いのに驚いた」との感想をいただいた。もちろん、当初はリップ・サービス半分と思っていたが、今回の演題を再度見直してみると、まんざらAziz教授の言うこともはずれてはいないかもしれないと思えてならない。

また、この学会の今後の運営に関しても、学会前日開催された理事会で佐藤信紘理事長を中心に検討されたが、ますます多くの臨床医や研究者がこの分野に興味をもち、そして会に参加しやすくするために、関連の研究会との合併や統合も視野に入れて活動していくことが確認された。「消化器領域に起こる多くの症状や機能異常を理解するためには、消化器局所にだけ目を向けていてもだめだ、広く神経や免疫にまで目を向ける必要がある」との本学会の意図は、多くの臨床医や研究者のニーズに合致するものである。そしてそれは、今回の学術集会への参加人数の増加が如実に物語っていると思われる。今年の第7回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会は東京大学大学院農学生命科学研究科の尾崎博教授を会長として2008年9月30日に東京大学鉄門記念講堂で開催される。昨年以上の多数の臨床医や研究者の参加を期待している。最後になったが、第6回学術集会の優秀演題を下記に示す。受賞者の栄誉をたたえるとともに、受賞された先生方がますます研究に邁進され、この分野の研究をさらに発展させていかれることを祈念する。

第6回日本Neurogastroenterology学会会長
兵庫医科大学内科学(上部消化管科)教授 三輪 洋人

【第6回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会最優秀演題賞】

東京大学大学院農学生命科学研究科獣医薬理学教室 堀 正敏
「自然発症クローン病モデルマウスSAMP1/Yitにおける小腸蠕動運動機能障害」

【優秀演題賞】

兵庫医科大学内科学(上部消化管科) 櫻井 淳
「ラット胃の伸展刺激によるERK1/2の活性化」

東北大学大学院医学系研究科行動医学分野 渡辺 論史
「内臓感覚の中樞神経プロセッシングにおける神経活動同期性の検証」

兵庫医科大学内科学(上部消化管科) 大島 忠之
「ラット慢性酸型逆流性食道炎モデルにおける自発運動とタイトジャンクション」